



After 71years

外国語学部 英語英文学科 3年

杉山美奈・玉木千尋・利渉慶次郎

はじめに

終戦から七十年、広島県広島市にある平和記念公園では、多くの人々が慰靈碑や原爆ドームに目を向けていた。空がよく見える広大な土地と緑の木々に囲まれたこの場所では、時間がゆっくりと流れているように感じ、七十一年前にこの場所で起きた出来事を想像することが難しく感じる。

一九四五年八月六日、広島の中心地である広島市に原爆が投下された。原爆炸裂後、強烈な熱線に包まれたその町は一瞬にして形を変え、九万人以上の人々の命が失われた。爆心地近くにあった産業奨励館は、原爆投下後「原爆ドーム」と呼ばれ、約七十年が経った現在でもほとんど被爆当時の姿のまま存在している。終戦から多くの年月が過ぎた今でも、原爆ドームのことを知っている人は数多くいるだろう。しかし、その歴史について正しい知識を持つている人はどれほどいるだろうか。日本は唯一の被爆国であるが、その歴史についての正しい知識や自分の意見を持っている人は少ないようを感じる。

終戦から半世紀以上が過ぎた今、戦争を経験したことのない人が多く、その数はさらに増えていく。しかし戦争の経験がないからこそ、その

原爆の歴史

原子力爆弾、略して原爆、そして、称ピカドン、この歴史は日本から、一九四五年八月六日午前八時十五分、広島へのアメリカ軍の世界で初めて実戦使用した時から始まった。原爆の歴史という時計は止まることなく永遠に時を刻み続ける、いや歴史を、時を止めてはいけない、後世に残し、平和のために対話を続けるためにも。

私達は見て、読んで、聞いた

ここに書くのは、今まで歴史の授業で学んできたことではない、私達が足を運んだ広島の平和記念資料館に見て、読んで、聞いたことについてだ。沢山の展示物があり、当時の物も再現した物も全てこの世の物とは思えない、それもそのはず私達は平和な世界で生きているからだ。それでも凄惨な歴史を資料館にて見終えた。

歴史について学び、しっかりと自分の意見を持つことが大切なことがある。現代まで原爆ドームが残されている意味についてしっかりと考え、語り継いでいくことが戦後世代の人々にとつて重要なことなのである。

いなかったか、アメリカが日本に落とした原爆の歴史を説明させていただきたい。

第二次世界大戦が始まった一九三九年（昭和四年）、ドイツで原爆の開発が進められている

のではないかと恐れた科学者の意見をきっかけに、アメリカは原爆の研究に乗り出した。



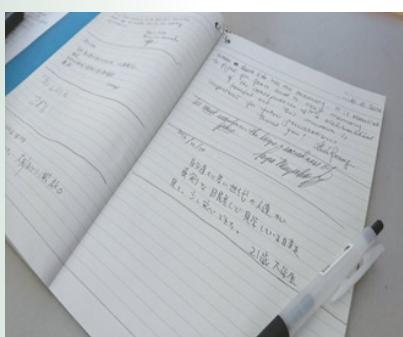
一九四二年（昭和一七年）八月には「マンハッタン」計画と名付けられた原爆製造計画に着手した。原爆は日本への使用が検討され、条件は二つ、一つ目は、投下目標は都市が一定以上の規模であること、二つ目は、爆風で効果的に損害を与えることができるることである。目標となつた都市には空襲が禁止にされた。

写真は資料館入り口にある地球平和監視時計である。これを見て、曖昧だった原爆の歴史が鮮明に目の前に現れることで、正直たじろいだ。上段の二万六千五十九日は広島への原爆投下からの日数であり、下段の九十二日が最後の核実験からの日数である。原爆投下から七十二年後という知識から、前者の日数はすぐに理解でききたが、後者の日数の短さには日本の非核三原則を踏まえると、恐怖を覚えた。九十二日前、およそ三か月目に世界のどこかで、広島にいた約十四万人を苦しめ、死に追いやった原爆を作った核実験をした人間がいるという事実に。

ここで、なぜこの監視時計が作られなければ

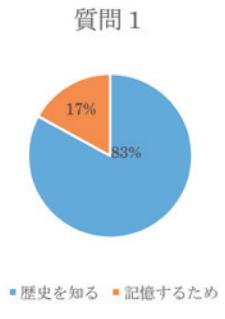
歴史の今

今、資料館の出口には一九七〇年（昭和四五年）十月十七日の設置以来、児童、生徒、親子連れ、遠く海外からの来訪者など、年齢も言語も様々に、多くの人が戦争や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さなどについて思いを新たに、自由な感想が対話ノートに綴られている。



インタビュー

今回私たちは、原爆ドームとその周辺の資料館に訪れていた外国人観光客にインタビューを行つた。日本人には周知の事柄である、第二次世界大戦に広島に世界で初めて原爆が落とされたという事実を、原爆ドームに自ら訪れた外国人の方たちがどのように考えているかを知るためにある。



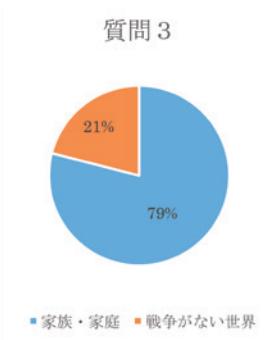
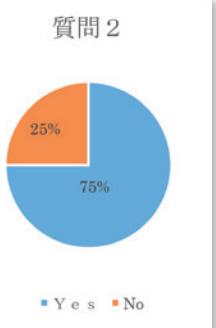
私たちは十七組五十人の外国人観光客三十人の日本人観光客に三つの同じ質問をした。まず一つ目は『どのような経緯で原爆ドームを訪れたのか』二つ目が、『原爆ドームに来る前と後では自分の考え方方が変化したか』最後の質問は『あなたにとつての平和とは何か』以上の三つである。一度この質問を自分で考えて今からの回答と比較してみてほしい。まず外国人観光客の質問一の回答であるが、一番多かった回答は『歴史を知るため』といふものであつた。次に多かった回答は『何が起こったか自分で見て記憶するため』という回答だ。

いざれも自分自身で、日本で起つた惨劇を理解しようと広島の地に外国から訪れていた。また国籍は、対戦国であったアメリカの方々が一番多く、二番目に、オーストラリア、その他はサウジアラビア、ドイツ、イスラエル、ブラジルであつた。インタビューは行えなかつたがアジアの方も大人数のツアーで訪れていて非常に多様な国籍の人が歴史の地に訪れていることが分かる。それほど原爆が市街地に落ちたという事実は、世界でも驚くべきことで関心を集めることがわかる。

二つ目の質問の回答は、私たちは見た後では、外国人の方だと変化するのではないかと予想していた。しかし以外にも変わらないと回答した割合が多かつた。

最後は自分にとつての平和を投げかける質問であるが、難しいな（笑）という反応であつた。たしかにこの質問はシンプルなように見えるが実際に考えてみると意外に難しい。一番多かつた回答は「家族」「人々が仲良くすること」という人とのつながりに関するものであつた。一番目は「争いと憎しみがない世界」である。どちらの回答も戦争という事実を通して自分にとつての平和を考えた結果であるが、改めて他人が自分にとつて、世界にとつて大切であるかが分かる。

変わらない理由としては、「戦争はもともとすごくひどくて悲しいものであるから、その考えは変わらない。」といった理由であつた。また考



次に日本人観光客の回答である。日本人観光客の回答は回答数ではなく回答理由に着目した。一つの回答として多かったのが、社員旅行・広島観光のついで・映画を見たから・オバマ大統領が訪れたからという回答で、興味本位で来たという理由が外国人観光客に比べて目立つ。また老人の方は、様子を見たかったという理由が多く、戦争世代の方々が自分の目で見たくて来たという回答も多かった。

質問二の回答は、ほとんどの人が変わると回答している。外国人の回答理由とは異なるものがある。例えば、目を背けていた戦争というものの考え方が変化した・学んできたことや報道とは違うと感じた・改めて重く感じた、といった回答である。ほとんどの人が、原爆が投下された場所という認識はあったものの、現物を見るの当たりにすると思っていたより悲惨なものでの当たりに対すると思っていたり悲惨なものでの当たりに思つた結果となつた。また老人の方の回答理由として、「今すぐには変わらないが考えるものがある。」というものがあつた。この言葉の意味には、この戦争を機に何かが変わつてほしいという意味が含まれているのではないだろうか。戦争について深刻に考えたことがない人は、今一度原爆の恐ろしさを考え直すべきなのかもしない。

最後の質問の回答は、外国人観光客とあまり変わりがなかつた。やはり家族といった人のつながりや、幸せで戦争のない世界であることが自分にとっての平和であるといった回答である。また子供を持つ親の立場にある方は「普通の生活が一番の平和」であると言つていた。普通に生活していることが何よりも幸せなのかもしないと再認識することができる。

今回のインタビューでは幅広い国籍と年代の方々に話を聞くことで、戦争や原爆投下についての考え方を知ることができ、自分たちもそれについて再認識するきっかけとなつた。日本人にも外国人にも居候しているのはやはり戦争は起こつてはいけないものである、ということである。この気持ちを決して忘れることなく後世に伝えることが大事である。

オバマ大統領の広島訪問と核兵器

日本とアメリカにおいて、原爆投下に対する考え方は大きく異なる。アメリカでは、広島と長崎への原爆投下は戦争を終わらせるために必要な手段だつたと考える人が多くいる。そんななか、アメリカの大統領が被爆地である広島を訪問したことは、歴史的な出来事だといえる。アメリカのバラク・オバマ大統領は、



（注）二〇一六年五月現在、最後に行われた核実験は、二〇一六年九月九日の北朝鮮での核実験。

二〇一六年五月二十七日、核兵器保有国の現職の大統領として初めて平和記念公園と広島平和記念資料館を訪れ、安倍晋三首相と共に核兵器廃絶へ向けたメッセージを記し、自らが折った二羽の鶴を添えた。このことは、日本やアメリカにおいて大きく取り上げられ、報道された。また、平和記念資料館にもオバマ大統領が記したメッセージや折り鶴が展示されている。これほどまで大きく取り上げられた理由は、現職の大統領が初めて広島を訪れたからということだけではないだろう。核兵器保有国の大統領が、原爆が投下された広島を訪れることが、また核攻撃の許可を出すことができるといわれてゐる「核のフットボール」という道具の存在など、疑問が残るからだろう。オバマ大統領は広

島訪問の際に、「私たちは戦争の苦しみを経験しました。共に平和を広め、核兵器のない世界を追求する勇気を持ちましょう。」というメッセージを残した。このメッセージは、広島平和記念資料館においてオバマ大統領が実際に記した英語と和訳された日本語で展示されている。アメ

リカの現職の大統領がこのようなメッセージを残したことに対して、現代の人々がしつかりと考えていくことが大切だろう。

広島平和記念資料館の入り口には上記でも述べられていたように、「地球平和監視時計」というものが置かれている。この時計は、「日数表示」と「歯車」から構成されている。一段目には、「広島への原爆投下からの日数」二段目には、「最後の核実験からの日数」が表示され、一段目の日数の表示は新たな核実験が行われた場合、この



おわりに

日数がゼロにリセットされる。その下にある歯車は、人類の破滅への刻限を表している。広島への原爆投下からの日数と最後の核実験からの日数を実際に目にして、平和に対する考え方を見つめ直すことができるだろう。

戦争経験者の高齢化が進む現代において、後世の人々が戦争について学び、語り継いでいくことが大切だといえるだろう。しかし、ただ歴史について調べるだけでなく、実際に現地へ行って、その場の雰囲気を感じることや人々の話を聞くことが重要だろう。今回の広島訪問において、原爆ドームや資料館を実際に訪れることで改めて感じることや平和に対する考え方など、新しい視点を持つことができたといえる。また、

約七十年前に原爆が投下されたその場所で日本人や外国人にインタビューを行い、それぞれの考え方について考察していくことは、戦争や原爆、そして平和について考えていくなかでとても重要なことである。

終戦から七十年が過ぎた今、戦争について改めて考え、歴史を学ぶことはとても大切なことだといえる。唯一の被爆国である日本人の人々が戦争についての知識を持ち得ず、原爆につい

てはつきりと自分の意見を言えないということは、戦争の惨禍を風化させることと同じではないだろうか。様々な国において今もなお核実験が行われているなかで戦争や原爆について考えることは、今後の未来を生きていく人々にとって、とても大切なことだといえるだろう。

